

◆猫とお酒とフィンランド

キヤスティングから「やっぱり猫が好き」を思い起こしましたが、監督はそのことを意識しましたか？

実はわたしとしてはまったく意識していません。わたしは「やっぱり猫が好き2005」の脚本を書いて、そこで自分の憧れをしっかりと反映させてもらったので、もう次の段階へ進んだという気持ちなんです。ですからそこは完全に切り離して考えることができました。

でも最後のマサコが戻る理由に原作には無ければ猫が絡んだりしていますよね。

わたし自身が猫を三匹飼っていて、猫が好きなんです。前作の『恋は五・七・五！』にも猫が出てきていて、きつと次回作にも出ちゃうんでしょうね。ラース・フォン・トリアーが提唱したドグマ95ってありますよね。あのルールの中に「猫は出す」というのがあったんですよ。それが凄く気になっていて、自分の中で「猫が出る映画は良い映画」って変な捕われがあって、出しちゃいますね。最近ハマっていることは？

猫以外にですか？ フィンランドが相当魅力的だったのか、トリノ・オリンピックも、日本よりもフィンランドを応援していましたね。結局五回往復しましたが、行くたびにイッタラ社の食器を重たい思いをして買ってきたし、引越しをしたばかりだった



したか？

最初は珍しくてしょうがなかったんですけど、だんだん「こんな時間までお酒を飲んでいられる」なんて思ったりして。

フィンランドはお酒が高いですよ。

値段も高いですし、アルコール度も高いですね。ビールでも日本のものより強いです。わたし好みだったりします笑。

◆映画作りは奥が深い

映画はやればやるほど面白くなると以前仰ってましたが今もその気持ちに変化はありませんか？ 長編三作目になりましたが、続けて来て見えてきたことは？

本当にやればやるほど奥が深く、まだま

こともあって、カーテンの生地を買ってきて母に縫ってもらったり。フィンランドに住みたことです。

だだより分かってしまったのが辛いというところ。現場はとも大変なので、すごく弱気にもなるんですけど、一般に公開されてお客さんが来てくれて笑い声なんか起るのを聞くと、「ああ、また作りたいな」と思ってしまうんです。先日ウッディ・アレソンの新作を観に行つて、調べてみたら彼は一九六九年から毎年一本ずつ作り続けているんです。最近また面白い彼の作品が観られていて、やっぱり継続は力なりなのだと思う、自分もやめちゃいけない、どうであれずっと作り続けて行こうと思っています。

自分の持ち味はどこだと思えますか？

よく言われるのは、「ほのぼのして悪い人があんまりいない」ということなんです。自分でもそうかなと思います。「荻上が撮る映画ってこういう感じだよ」というのがある方向に行けたら良いと思っています。

映画を作ろうと思っきっかけは何？

面白そうって思うこと以外ないなあ。人と同じものを作つてもしょうがないので、切り口が今まで見たことのない、新しいチャレンジができるものに興味をそそられます。

この次の企みは？

フィンランドで映画が撮れたから、もうどこでも撮れるという自信につながったので、また外国で映画を撮りたいなと思っています。そして、次を撮つて自分の持ち味を決定づけられればいいなと思います。

(まとめ・写真 梅木直子)

荻上直子監督作品の魅力

宮崎 暁美

「荻上直子監督作品の魅力は、なんといっても発想のユニークさ」 思いもよらない設定が登場する。ダサイような、いまだきでないような設定を、オシャレに仕上げるセンスの良さ。皮肉とユーモアをバランスよく織り込んで、コメディともシリアスとも取れる一種独特の作風を持っている。そんなところに惚れました。

『バーバー吉野』では吉野刈りというキリスト教の修道士のようなオカッパ頭が登場し、『恋は五・七・五！』では、およそ現代の高校生には似つかわしくない俳句がテーマだった。そして、最新作『かもめ食堂』ではフィンランドの食堂でおにぎりをおにぎりという設定。まったくニヤリとしてみます。

荻上監督のデビュー作『バーバー吉野』では、オカッパ頭にスモックのような服を着た少年たちがたくさん並んでいるチラシを見て、なんだこりやあとと思ひ、チラシに惹かれて映画館へ。田舎町の小学生の男の子たちが、背伸びして大人ぶっている様がおかしくて、「いるよね、こういう少年」って思った。しかし、監督、よく男の子たちの生顔を観測している。「監督はきつと、男の子になれたかったんじゃないかな？」って思えるくらい、男の子たちに思い入れしているなと感じた。そして、秘密基地のところでは、子供の頃のことを思い出した。私も近所の雑木林に、秘密の隠し場所をもっていたから。

吉野刈りを強要する吉野のおばちゃんには、こわいような、やさしいような雰囲気をもっと出したいまきこを起用し、吉野刈りを押し付けるおばちゃんを、憎たらしい人物ではなく、愛すべき人物として描いていた。

この第一作で、この監督の作品は全部観よう、絶対、面白い作品を作るに違いないと思った。そして、とうとう日本にも商業映画でやっていける女性監督が出てきた！って嬉しかった。

『恋は五・七・五！』では、俳句の甲子園なあってあるのかしら、架空の設定かしらと思つていたら、ほんとにあるのにはびっくりした。それにしても、体育会系のスパルタ教育をする俳句部の姿は笑えた。私は俳句なんて、全然できないんだけど、最後の「俳句バトル」では、自分も俳句を考えていた。その気にさせる不思議な作品だった。

そして、最新作『かもめ食堂』である。これは、荻上監督作品というだけで観たい作品だけど、小林聡美、片桐はいり、もたいまさこに原作 群ようこ。このメンバーがそろって、面白いはずがない！

ヘルシンキに食堂を開いたワケあり日本人女性と、フィンランドの人々が織りなす不思議な面白さと心の安らぎをかもめ食堂の物語、売りはおにぎり。ちつとも客の入らない食堂で、皿を磨くサチエ。毎日、毎日、覗いていくだけの客と、そのうち、毎日通つてくるようになって日本オタクの青年。その繰り返しがゆつたりとしていて、フィンランドの時間の流れに入り

込んでいく大事な導入部だった。それにしても、ガツチャマンの歌詞を聞くフィンランド人って、やっぱりユニーク。

そして、小林聡美の凛とした立ち姿がいい。今は来なくとも、そのうちに来店する客はいるはずという雰囲気が出ていた。片桐はいりは、そのぬーつとした姿が出てきたとたんに笑えるのだけど、それほど、存在感がある。街で偶然見かけて知り合い、ガツチャマンの歌詞を知っていたことがきっかけで、かもめ食堂を手伝うことになった。徐々に客が入り始めたけど、注文するのは、売りのおにぎりではない。そんなときやってきたマサコはおにぎりを注文する。そのおにぎりはみんなの注目の的。次の日から、おにぎりは人気メニューになり、マサコもかもめ食堂を手伝うことになった。三人はトナカイやザリガニ入りのおにぎりも考案する。私もこんなおにぎり食べてみたい！ そしてかもめ食堂は、とうとう満員になった！ やったね。

